

オレンドルフ教授法の受容の考察

——井上勤ならびに岡倉由三郎の受容を中心に——

金 沢 朱 美

キーワード：文法訳読教授法、問答法、井上勤訳『六ヶ月間英語卒業書』、岡倉由三郎、「朝鮮国民教育新案」、『教育時論』、『外国語教授新論』

1. はじめに

オレンドルフ (Heinrich Gottfried Ollendorff, 1803-1865) が開発したオレンドルフ教授法は、文法訳読教授法として、19世紀中葉に隆盛を極めた。

日本語教育史においても文法訳読教授法による一指導法として、しばしば名前が挙げられるが、考察の詳細は多くはなされていない。

本稿では、オレンドルフ教授法が日本に紹介され、井上勤によって伝統的な漢文訓読式訳解を踏襲した翻訳法とされたことなど、先ず、井上によるオレンドルフ教授法の受容について考察し、日本において受容された実体を探る。次に、岡倉由三郎が旧韓末における日本語教授にオレンドルフ教授法を用いた事実に言及し、岡倉の日本語教育におけるオレンドルフ教授法の受容の考察とその史的意義を探る。

2. オレンドルフ教授法の考察

2-1 教授法の概要

オレンドルフが開発した教授法は一般に文法訳読教授法といわれる。例文があり、文構造の説明から始まり、対訳を付した単語表があり、単語に交じって、単語の使い方を示す短文が入り、翻訳の練習問題がある。しかし、オレンドルフの文法訳読教授法は、practical approachと評されたように、教材の内容としては古典的な文法訳読法ではなく会話の練習に相当配慮していたようである。本稿では、明治21年(1888)に井上勤によって日本語訳を施し、出版されたオレンドルフ著『六ヶ月間英語卒業書』(“The Book of Learning English in Six Months”) (以下、『卒業書』)の詳細を考察することにより、オレンドルフ教授法の実際について調べたい。なお、本稿における全ての引用文献については、旧字体を稿者が新字体に改めたほかは、表現等現在と使い方が異なる場合も原典のまま引用した。

井上(1888)の「緒言」には以下のように記述されている。

此書ハおるれんどるふ (Ollendorff) 氏ノ法ニ依リテ組織セシモノナレドモ英人ノ仏独語ヲ

学ブト日本人ノ英語ヲ学ブトハ大ニ異ナレバ多少取捨補綴セシ処多シ且ツ言語ノ運用ヲ實際ニ示サンガ為メ文法ノ理論ヲ後ニセシ処又多シ従来吾国ニテ刊行セシ英語学ノ書ハ大抵文法ノ綱領ヲ説キタルモノナレドモ元来文法書ナクシテ言語ノ発達シタル吾国人ノ脳ニハ入ル事頗ル難ケレバ實際ヲ先ニシテ理論ヲ後ニシタルナリ

井上勤は日本人が理解しやすいように内容を取捨補綴したとある。井上に拠ると、従来、日本で刊行された英語学の書籍は大体が文法重視であるが、元々文法書が生まれずに言語が発達した日本人には文法から入ることが難しい。ゆえに、先ず、言語の運用を實際に示すために例文を掲げるようにし、後に文法説明をしたとあり、説明と練習を置き換えた部分や、工夫を凝らした箇所があることがわかる。例文中においても文法の説明は詳細かつ丁寧でわかりやすい。例文には、江戸期オランダ語学習等にも用いられた方法である、漢文の返り点式の読解順序を付してある。一例の“Have you?” に対して、かたかなでの読み方表記と、井上が「直訳」と称する逐語訳と漢文式の読解順序とが示されている。逐語訳を示した上で更に井上がいうところの「意識」を右側に掲げている。疑問符に関しても懇切な解説が付され、かたかな英語による説明のみではなく、必ず原綴が付されている。原典の本文を見易くするために一例毎に表にした。

ハブ Have 持ツカ 二	ユー you? 汝ハ 一	貴君 ^{ママ} ハお持デスカ (?印ハ Interrogation mark. ト云ヒ疑問ノ文ニ付スル記号ナリ) <small>インターロゲーション マーク</small>
------------------------	-----------------------	--

イエス Yes, 然リ 一	アイ I 私ハ 二	ハブ have. 持ツ 三	ハイ持ツテオリマス
------------------------	--------------------	------------------------	-----------

(中略)

ハブ Have 持ツカ 四	ユー you 汝ハ 一	マイ my 私ノ 二	ハット hat? 帽子ヲ 三	アナタハ私ノ帽子ヲお持デスカ
------------------------	----------------------	---------------------	-------------------------	----------------

イエス Yes, 然リ 一	サー sir, 足下ヨ 二	アイ I 私ハ 三	ハブ have 持ツ 六	ユア your 汝ノ 四	ハット hat. 帽子ヲ 五	ハイ私ハアナタノ帽子ヲ持ツテ居リマス
------------------------	------------------------	--------------------	-----------------------	-----------------------	-------------------------	--------------------

(以下の例文省略。)

凡テ以上ノ如ク言語及熟字ヲ連接スレハ一文章ヲナスモノナリ例ヘバHave you? ハ日本語ノ〔アナタハ………ヲお持デスカ〕ト云フ文章二等シク此………二代用スルニ帽子ナル名詞ヲ以テスレバ即チ〔アナタハ帽子ヲお持デスカ〕ト云フ完全ナル文章トナル如クHave youノ次ヘthe hat. ヲ添ヘテHave you the hat? トナセバ初メテ一文章ヲナスモノナリ (以下、略。)

2-2 考 察

以上の概要からわかることをオレンドルフ自身の工夫と井上勤ほか当時の日本人学者の工夫に分けて考察する。

2-2-1 オレンドルフの工夫

全体的に短い会話を構成する文で成り立っており、繰り返し会話の基本文型が練習できるようになっている。疑問文と平叙文が交互に配列されており、問答法による練習が軸になっている。文型に使われている語彙は、日常生活に密着した語彙であり、オレンドルフが旧態依然の古典的文法訳読法ではなく、学習者の会話の習得をも目指していたことは明白である。自習できるよう単語の使い方や文法が詳述されており、文法訳読教授法ではあるが、会話習得に比重をかけていることが窺える。

Howatt によると、オレンドルフ自身は次のように述べている。

…生きた言語を習得するための、私の方法は、各質問が、答えるべきまたは答えたいと思う答えをほとんどその質問のなかに含んでいるという原則に基づいていることである。問答形のわずかな相違については常に質問の前に説明がある。だから学習者は、答えるにも質問をするにもそれほど難しさを感じない。質問形と答えの形は同じだから、教師が質問すると、それは直ちに学習者の耳を打ち、簡単に再生され得るのである。¹ (稿者訳)

長沼はオレンドルフ教授法について次のように述べている。

…従来より非常によい方法が考えられ、アーン Ahn やオレンドルフ Ollen-dorff 等の本ができた。(中略) そういうのは今の直接法と、昔の翻訳法の間で、たくさんの文法上の練習を与えた。(中略) 発達の歴史から言うと従来の翻訳法ばかりでいったものが、アーンやオレンドルフにより多少日常の言葉をできるだけ反復し練習させることにより熟達させるようになってきた。²

長沼はまた、問答法と自由会話の違いを詳説し、初級におけるオレンドルフ式の問答法を高く評価している。³

オレンドルフ教授法では、構造主義的なアプローチに近いものも感じさせる。

また、長沼も指摘するように会話を重視した今日のコミュニケーション中心のシラバスにもなっ

1 Howatt (1984, pp.141-142)

2 長沼 (1981, p.131)

3 長沼 (1981, pp.95-97)

ている。

一方、Howattは批判も交え、少し別の観察をしている。

…平叙文（答え）の文構造が疑問文（質問）の構造に密接に関わっているが、これはそのように答えるべきだとか答えたいという答えの形とあまり関係はない。疑問文と答えの文との間のわずかな違いに関して、オレンドルフが言及していることは特に不鮮明でわかりにくい。一種のcueシステムのようにも見えるがその機能は不明瞭である。⁴（稿者訳）

Howattは、以下の練習題を引用してこれらの問答形の連続には番号も付されておらず、切れ目もなく一種不自然な質問群を構成していると述べている。

Where do you live? I live in the large street. Where does your father live? He lives at his friend's house. Where do your brothers live? They live in the large street, number a hundred and twenty. Does thou live at any cousin's? I do live at his house. Do you still live where you did live? I live there still. (後略)⁵

しかし、上記の練習例文は別の見方が可能である。上記の例を見ると、確かにオレンドルフの問答練習は延々と続き、一連の話が構成されているようであり、一文が文型として提示されているとはいえない。現在の文型積み上げ法のようにすっきりした文型練習法とはいえない。それでも最終的に会話を目指したこれらの練習問題の新しさは、その後のドリル出現に影響を与えたようである。当時としては斬新で、現在も盛んに使われている文型練習に連なっていく教授法をオレンドルフが不鮮明ながら考えていたことが窺われる。

一方、Howattによる好い評価のほうは以下のようなようである。

オレンドルフは言語学習の段階的なシラバスを使って、教科書を書いた最初の人であり、習得項目は一つずつ紹介され、他の大部分の文法訳読法を用いる著者とは異なり、一課のなかに一項目の理論的枠組みの全てを提出することに固執しない。⁶（稿者訳）

オレンドルフの教科書の中の質問項目については、Howattは「変わった質問」と批判しているが、次の例文のように、練習とはいえ、いかにも意味のない文が使用されている箇所は確かに多くある。形容詞を変えて同じ文型練習が繰り返されている。下例では漢文式訳解法と発音のかたかな表記を省略する。

Am I hungry?	私ハヒモジウゴザイマスカ
You are hungry.	アナタハヒモジウゴザイマス
You are not hungry.	アナタハヒモジウゴザイマセン ⁷

4 Howatt (1984, p.143)

5 同上、p.143、例文の原典はOllendorff (1841, p.155)

6 Howatt前掲書、p.143

7 『卒業書』p.10

しかし、長沼の前述の問答法に対する解釈のように、「これは外国語の運用訓練の手段としての、相談づくできめた、形式的問答なのだから、いわゆる自由会話とは非常にちがっている。(中略) このテクニックができないと、いわゆる新しい教授法というものはできない。」⁸ ことを考えれば上記の問答も意味ある練習として理解できる。

『卒業書』の第1課は“Have”の項目であるが、第一復習課程として40題の練習題が並んでいる。主語を変えて、目的語を変えて繰り返し、ごく易しい問題がならんでいる。練習の例文は「あなたは私の新しい麦藁帽子をもっているか」といったような、口頭練習を目的とした練習題が膨大な量で準備されている。“Have”の後には“Has”の紹介があり、例文とともに延々と練習が続く。無味乾燥な膨大な練習量を課する点も後のオーディオリンガル教授法に相似しているといえるであろう。

ここには、後のオーディオ・リンガル教授法の文型練習に対するかつてのコミュニカティブ・アプローチ側からの批判と同様の批判がなされると思われる。しかし、当時、オレンドルフ教授法が一世を風靡して隆盛を誇ったのは、問答法による易しい文型らしき文の積み重ねの練習が、確かに外国語の会話習得に大きな効果があったからである。オレンドルフの語学教科書“A New Method of Learning to Read, Write and Speak a Language in Six Months (1835)”は、外国人学習者にドイツ語を教える教材としてだけでなく、フランス語や英語、イタリア語教授法としても後に刊行された。文法訳読教授法とはいうものの、文型積み上げ的な膨大な量の練習題、問答法による文型練習の萌芽が見られ、新しい方向を目指していたと考えられる。

『卒業書』の内容のレベルに関しては、長文読解を除いた最後の454ページに至っても初級上程度である。同じ文型の説明が詳述され繰り返しでてくるので、自習書としては懇切丁寧な書であると評価できる。

本文は最後まで問答法を含む会話体であるのに、末尾に付されている練習題だけが物語風の長文読解で、本文の内容にそぐわず不自然である。長文読解のレベルは中級程度であると思われる。

音声に関する解説も懇切丁寧である。例えば、規則長音、規則短音、各母音の弁別のしかた、唾音(silent)の“l”、唾音の“b”、唾音の“c”、等と各群に分類し、豊富な語例とともに発音のしかたを詳説している。「以上挙ゲル所ハ極メテ簡単ナル綴ノミナレドモ能ク是ニ熟セバ如何ナル難語モ容易ニ発音スルヲ得ベシ次ヲ見ヨ」⁹とあり、音節に区切った発音のしかたをも詳述している。現代の語学学習書においても、これほど豊富な語例を提供して発音を詳述している学習書は滅多にないのではないと思われる。

2-2-2 井上勤ほか日本人による工夫

井上は、江戸期の蘭学と同様に、『卒業書』にも漢文訓読のための返り点方式を採用している。現在の日本語教育における教科書の練習問題においても、単語を順不同に配置し、日本語の統語法

8 長沼(1981, p.96)

9 『卒業書』p.x

に従って順番を付けさせる練習問題があるが、返り点を付すのと同様に文構造を理解させるためには有効であろう。このように返り点を明確に表記して繰り返し練習する方法は、初学者にとって文構成を理解し、習得する優れた工夫であるといえるだろう。

漢文訓読法式や逐語訳方式の外国語学習への採用は、井上勤だけの工夫ではない。渡辺は、

欧文を逐語訳の原理で直訳する習慣は、蘭学の時代に起源を有する。(中略) 逐語訳の方式は読むオランダ語という蘭学の性格を条件として、伝統ある漢文訓読の経験を生かしたものに他ならなかった。(中略) 欧文に対する逐語式直訳が、全文訳に従属しないで存する最も早いものは(中略) 中浜万次郎の『英米対話捷徑』ではないかと思う。¹⁰

と述べ、一例を挙げている。稿者も『英米対話捷徑』から別の一例を挙げる。

		不	寝	昨	夜
わたくし	ありし	レずで	レいね二	さく	や一
アイ	ハーデ	ノー	スリープ	ラスト	ナイ
I	had	no	sleep	last	night. ¹¹

オレンドルフは一語一語の単語の発音について詳細な解説を施しているが、その語彙の上に、発音指導に関する日本人の工夫として、井上も中浜と同じように一つひとつかたかな表記を重ねている。このかたかな表記で発音を学習した日本人の発音はいかなるものであったろうか。

翻訳文については以下に述べるように、『卒業書』当時、言われていた「直訳」、「意識」は今日我々が意味するのとは少しく異なるようである。

『卒業書』は全部で457ページに亙る大部な本であるが、井上が言及している「直訳」の逐語訳は419ページに至るまで例文に施されている。422ページに至り、次のような注意書きがある。

直訳ハ是迄ニテ大抵了解シタル事ナレバ是ヨリハ只意識ノミヲ施スベシ但シ錯雑ナル文ハ時
二直訳ヲ施ス事アルベシ

とあり、以下の意識のみの例文が続く。

ハブ	ユー	ブレッキファステッド	サー
Have	you	breakfasted,	sir?
アナタハ朝飯ヲ召シ上ガリマシタカ			

ユー	カム	イン	タイム	サー
You	come	in	time,	sir.
丁度時分ニイラッシュアイマシタ				

10 渡辺 (1964, pp.1-3)

11 中浜訳 (1859, p.5)

上に見てきたように、『卒業書』のなかの「直訳」は漢文返り点方式を生かした逐語訳であり、原文の構造を理解するために施された逐語訳を完成文とせず、新たに日本語の統語法で施した訳が「意識」である。

渡辺は、

幕府は開港を契機として外国語の翻訳には原文の一語一句を手堅く押えてゆくぎこちない直訳文の方をむしろ重んじようとしたのである。そして恐らく幕府のこの態度は、日米和親条約の際の訳問問題が直接の契機であったかと想像される。¹²

と記している。当時、逐語訳の直訳が盛んであった原因が窺われる。井上も幕末の方法を踏襲して「直訳」で文章の構造を押さえた上で「意識」を施したのである。しかし、平賀によると、漢文訓読式直訳は日本人だけの工夫ではなく、仏独文英訳の際やラテン語英訳の際にも同じような工夫がされたという。¹³

2-2-3 岡倉由三郎の直訳反対論

同じくオレンドルフ教授法を支持した人のなかに、後述する岡倉由三郎がいるが、岡倉は「直訳」に対して以下のように五ページに亘り、理由を詳述して強く反対している。

…仮令へばHe went to Yokohama. を「彼は横浜にまで行きし」と訳するが如く「あの人と」云ふ方悟り易きを「彼」とし「へ」と云ふべきをにまでとし「行きました」を「行きし」とするが如き其一例なり（中略）

「彼の人は横浜へ行きました」と云ふべきを「彼は横浜にまで行きし」と訳するが如きを世間称して直訳と云ふ直訳の利なくして害多き事は上の例にても知らるべけれどなほ其不条理なる事を示さん為に左に其訳例を掲ぐべし

- 一. He is as tall as I. 彼は私だけそれだけ丈高くある
- 二. I thought to have seen him before. 私は前に彼を見たべく考へし

（後略）¹⁴（稿者註：一重下線部は原典では○印が付されている。二重下線部は原典のまま。）と述べ、生徒に訳語の意味するところを理解し難くし、丸暗記させる傾向を生む、習慣になると直訳をしなければ読解を困難にしてしまう、生徒に一語一語返り読みする習慣をつけさせてしまうために、朗読や説話を聞き取る力を失くさせる等の弊害が生ずるとしている。

しかし、井上の意味する漢文訓読式「直訳」と岡倉の意味する語義に忠実な「直訳」は、上に見てきたように解釈のずれが見られるようであるが、その比較考察が本稿の目的ではないのでこれ以上は触れない。

12 前掲論文、p.3

13 平賀（2005、pp.17-18）

14 『教育時論』第338号-340号附録「外国語教授新論」pp.28-32、1894年

3. 岡倉由三郎による日本語教育におけるオレンドルフ教授法の取り込み

旧韓末における日本語教育は、外国語としての日本語教育の時期である。1891年5月、当時の漢城、現在のソウルに設立された官立日語学堂における日本語教育をもって、正式の日本語教育の始まりとされている。¹⁵

司訳院や倭館時代の日本語教育は別として、近代における日本語教育は上記日語学堂に最初に招聘された岡倉由三郎（1868-1936）をもって嚆矢とする。

岡倉は日語学堂で上に考察してきたオレンドルフ教授法を用いて日本語を教授したということが、後述の「朝鮮国民教育新案」のなかに述べられている。

この時期の日本語教育におけるクラスの実際やその成果をつぶさに知るには、それを明確に記述した文献の存在確認が非常に困難である。先行研究における文献名にも誤りが発見され¹⁶、調査は困難を極めた。しかし、本稿では、上に見てきたオレンドルフ教授法が岡倉のどのような言語観や言語教育観によって取り込まれ、どのような効果を上げたのかを可能な限り明らかにしたい。

岡倉由三郎は、東大在学中にチェンバレン（Basil Hall Chamberlain）から言語学の一端として日本語文法とアイヌ語と朝鮮語を学んでいるが、「朝鮮語と日本語との構造上の類似」ゆえに「朝鮮語に一層強い親しみを感じるようになった。」¹⁷と述べ、学生時代から朝鮮語に対する造詣が深いことを示している。

卒業後、岡倉は朝鮮政府の日語学堂において明治24年（1891年）から明治26年（1893年）まで日本語教育に携わった。

岡倉は1894年8月22日、東邦協会において東京府下の教育家を招いて朝鮮国民の教育新案に対する相談会が開催された際に演説を行った。その演説が筆記され、校閲補修を経て出版されたものが『東邦協会会報』第2号附録に掲載されている「朝鮮国民教育新案」（1894）（以下、「新案」）である。「新案」のなかで、岡倉は「余は、去る明治24年より、朝鮮政府に聘せられて、日本語の教師と為り、同26年に至るまで、該国に在て、語学の教授に従事したりき。」¹⁸と述べている。「教育新案」として開設すべきは、中学校、実業専修学校、小学校であるとし、中学校での学課として外国語は日本語を推奨している。理由として、「一は日本語と朝鮮語と語脈同一にして相学び易すきか為めなり二は朝鮮に輸入する目下適當の知識は日本語中に含有せらるゝ最も多きか為めなり」¹⁹と論じている。前述したが、この時期、日本語教育は外国語教育の一環として実施された。岡倉は、「新案」のなかで、

…若し外国語を教ゆるとせば、必ず日本、支那、英吉利の三候補者現はるゝは今より疑ふべからず、（中略）支那語は其根本たる語脈よりして反対なり。之れを学ぶや困難にして、其益や

15 任栄哲（1997）の講演による。

16 「朝鮮国民教育新案」『東邦協会会報』第二号附録を、李淑子（1985）は『教科書に描かれた朝鮮と日本』の中で『友邦協会会報』と記している。『教育時論』を齊藤一（2001）は「翻案と翻訳－岡倉由三郎について」の中で『教育時報』と記している。

17 岡倉（1935）「恩師チャムブレン先生を偲ぶ」より。

18 岡倉（1894）「朝鮮国民教育新案」p.4

19 同上、p.7

少なし。英語は（中略）京城に一英学校あり、創立以来茲に八年。其間卒業者僅に一人、而かも猶ほ片言交りにして完全ならず。（中略）採用すべきは日本語のみ。²⁰（後略）（稿者註：下線部の原典には○印が付されている。）

として日本語を推すのである。

同時に岡倉は、漢字を廃すことを唱え、強力に諺文の優れている点を挙げる。

…従来漢学を勉めたるにも拘はらず、言語は全く自国語を以て学ばしめ、同時に文字も漢字を廃し、而かも朝鮮語固有の仮名文字即ち諺文を用ひしめざるべからず。蓋し朝鮮の文章は凡て仮名文字を用ひしむべし。（中略）人若し文字の可否を問ふものあらば、之を以て世界第一の文字と為すに躊躇せず。一証を挙げんか、例へば「ミ、ム」の如き唇頭より発するもの又は「ク、グ」の如き咽喉より来るものゝ如き、凡て其形状に依りて作りたればなり。且此文字は頗ぶる綴字に妙にして、（中略）彼等は既に斯かる佳良なる文字を有す。²¹（稿者註：下線部は原典では傍点が付されている。）

以上、岡倉の日本語観、諺文観、朝鮮語の学習歴を見るに、岡倉は日本語教授に対して外国語としての位置づけの認識が明確にあったこと、その日本語の教授に際して、自身も造詣が深く、その合理性を賞賛しているハングルを用いて教えたことは間違いないと思われる。

日本語教授の内容については非常な成果が上がったとある。

…余の担任せる日本語学校に徴するに、三ヶ月目にして通弁を廃するを得たり。一年半にして日本新聞などを読むもの数人を出せり。（日本の卑近なる俗語は未だ解せざるものも多かりき）三年にして通弁、差備官等数人を出すに至れり。（余はオレンドルフ²²の教授法を用ひたり）依りて朝鮮の爲めに計るに、外国語は日本語を以て最も利ありと為す。殊に近来朝鮮人の学校談を聞くに輒近興廢したる学校の種類も多し。然も結果を得たるは電信学校と日本語学校の二校なりしと云ひ居れり。²³（稿者註：下線は稿者による。）

以上の如く、「新案」からわかることは、岡倉が日本語教授に際し、オレンドルフ教授法を使用したこと、成果が非常に大きかったこと、外国語科目（日本語を含む）の学習者にとっての母語を媒介とした授業、即ち、諺文の活用、朝鮮語に対する深い理解等である。

しかしながら、ここにはオレンドルフ教授法を実際には如何ように使用したのかについての詳細は記述されていない。

次に、当時の教育関係の雑誌『教育時論』からわかる、岡倉の言語教育観について考察する。

『教育時論』第338号（1894、明治27年9月5日刊）には次のようにある。

…外国語は、覚へ易きこと、目下朝鮮人に必要なる知識を包含する二点に於て、余は日本語を主張す、（中略）此二長を備ふるものは、日本語なり。余の実験よりするも、朝鮮人は善く日本語を解し、大抵一年にして、普通の用を弁ずるに差支なきに至る。且や日本語は、目下朝鮮

20 同上、pp.11-12

21 同上、pp.10-11

22 岡倉は「朝鮮国民教育新案」の中でも、「外国語教授新論」の中でも、「オレンドルフ」と表記している。

23 岡倉「朝鮮国民教育新案」p.12

に必要な知識を包含して余りあり、又何をか疑はん。²⁴

同じく『教育時論』第340号（1894、明治27年9月25日刊）には、「岡倉由三郎氏の語学教授論」として次の記事が掲載されている。

…中学校師範学校等の卒業生が、数年間を刻苦して、英語を修め、尚且つ多くは未だ十分に其用法に通ぜず、又明瞭に英文の書を理解すること能はざるは、彼我語派の差異甚しくして、才力の平凡なる者には、之を識破すること易からざるに依ると雖、亦其教授法の宜しきを得ざるに出づるもの多し。（中略）又文法は、読書会話と共に之を授くべしとの説の如きはアリストートル以来、近世の教育大家が、皆之を論ずる所なれども、其実行せられざるは、全く教師其人を得る能はざるに依るのみ。苟も教師其人を得ば、死法を守りて、文法を教ふる如き弊害は、之を去ること難からず。²⁵

とあり、語学教授法の最も肝要なところは教授法であると力説している。要点は、文法は読書会話と共に教えるべきであること、教授法を心得た教師がいないため、なかなか実行されないこと、教授法を熟知した教師がいれば実際に適用できない文法だけを切り離して教えるような弊害はなくなるであろうとの考えを表明している。

岡倉の語学教授法に対する考えは、上述から大分明らかになったと思われるが、未だオレンドルフ教授法の実践に対する明確な論述には至っていない。そこで、次に『教育時論』第338号から340号にかけて、附録として連載された『外国語教授新論・附国語漢文の教授要項』（1894）（以下、「新論」）を考察することにより、オレンドルフ教授法の採用の一端が窺えると考えた。以下、「新論」を見ていきたい。岡倉は概略、以下のように述べている。

外国語教授の改正点として、「一、教授法の改正 二、教師の改正 三、教課書の改正」の3点が挙げられる。

外国語学習者のなかに、甲乙二種の学生がおり、甲は学校で「普通学」のなかの一科目として外国語を学ぶ者である。乙は外国語専修者であるが、乙のなかにも二種あり、個人教授の場合とクラスで複数の学習者が共に学ぶ場合がある。個人教授の場合は、「オレンドルフ」や「グアン」法等のような形式を採り、十分日本語の特質を考慮し、工夫をして教えれば「必ず良結果を生ずるに至る」。

乙種のクラスの複数学習者のための教授法については、甲種の普通学級の学習者と大差なく、また、事情が複雑なため、概説は困難であるゆえ、甲種の者について詳細を語る。甲種の初学者についていえば、外国語の教授は尋常中学第一年級から始めるべきである。

教授法の改正点としては、今日のように外国語の授業と日本語の授業がそれぞれ孤立し、相敵対するようではいけない、互いに連携するべきものである。最初の外国語は専ら国語を基礎として進めるべきである。教授方法は、従来、一、綴字法 二、習字 三、読方 四、書取 五、訳解 六、文法 七、作文 八、会話 九、翻訳の九種の科目があるとしている。

24 「朝鮮の教育制度を如何すべき」p.24

25 『教育時論』第340号、p.13

岡倉がオレンドルフ教授法に影響を受け、日語学堂における日本語教授に際して自身でも実践したであろうと思われる点は次の点である。

一. 綴字法について、例えば英語は綴字法が「乱れに乱れたる」が、それゆえ、単語を多く例示して、その発音と綴字法のなかに規則を見出し、生徒に教えるべきであるとする。これは前述したようにオレンドルフの教科書の優れた点で、聴解練習が困難であった時代に、発音について実に詳細に規則を示して、学習者の理解と練習を促している点である。岡倉も多くの例示をして綴字法の授業方法を説明している。

三. 読方についても、一文字毎の発音と一語としての発音と一文章としての読方に分け、綴字法との関連を論じている。一文字毎の発音を教えるには、「今、教ふる外国語に無く我が国に在る音また此れになくて彼にある音さては彼我の似て非なる音等一々丁寧に示すべし之を示すには図解を以てし発音の際の舌唇の位置を一々覗せしむるなど最も効能多しとなす」²⁶とあり、オレンドルフの一語一語の発音解説法のように極めて合理的である。読方には「聞き取」を同時に奨励している。

五. 訳解については、その一部を2-2-3 岡倉由三郎による直訳反対論において述べた。岡倉は一語としての訳解、一語句としての訳解、一文章としての訳解を詳説すべきことを挙げている。2-2-3において訳例を示したが、岡倉は「解釈の為用ゐることばは差支のなからん限り成るべく卑近にし通俗を専一とすべし説明上必要あるに非る以上は耳遠き漢語又は雅言を用る生徒をして訳語の理解に遅々たらしむるが如き事断然あるべからざるなり」²⁷と述べている。要は訳解には口語を用いることを推奨している。

六. 文法については、説話や作文等に他の教材から得た材料に基づいてその中から規則を見出し、応用すべきものであり、文法だけを重んじすぎると実際の運用を誤ることがあると、例を挙げて論じている。また、文法を教えるに当たり、常に教師自身の母語あるいは生徒の母語を比較の基礎とすることが肝要であると云っている。文法を上手に教えるために優れた方法は、「文法」という独立した科目を廃し、「会話」の時間において一方で会話の教材を与えると共にそのなかに出てくる法則を教えて会話と共に練習させる方法である。これは「彼のオレンドルフの外国語教授式の如きを、本邦語の性質に由り大に斟酌を加へて実行する²⁸」ということで、食物のなかに薬を混じて服用させるようなものである。こうすれば、文法の難しさを感じずにその効果を楽しむことができる。知らず知らずのうちに無味乾燥な規則を学ばせることができるのである。この種の方法が優れているのは世間では既に定評のあるところであり、自分自身も実験上、十分にその利点を感じた者の一人であると論述している。

実験というのは漢城の日語学堂での日本語教授を指していると考えられる。

会話教授のなかに文法項目をそれとなく導入し、練習させて文法を機能的に理解させるのは正しく本稿で見てきたオレンドルフ教授法の問答法であり、文型提出方法である。また、今日まで継続し

26 「外国語教授新論」p.25

27 同上、pp.27-28

28 同上、p.34

て最も効果ある方法として使われてきた文型積み上げ法にやがて連なる方法でもあり、ここにオレンドルフ教授法を採用した岡倉の真骨頂が見られる。

八. 会話の教授については、従来の「時候の挨拶」「旅中問答」等の、(稿者註：今日、Situational syllabusと呼ばれる) 教授法も中級以上の生徒には悪くはないが、初学者にはオレンドルフ教授法のように、「ことばの組織上似寄りたる語句文章の使用に慣れしめ生徒をして其学びたる一定のことばづかひに拠り之になづらへて自らこれと同類のことばづかひを為す事を得せしむる様努むべき²⁹⁾」である。語彙は無限にあるけれども同類毎に分類すれば、生徒は理解し易く運用できるようになる。暗記力を基とする教授法より優れている。無味乾燥とした文法を学ばなくても知らず知らずのうちに実力がつく³⁰⁾と論じている。

ここには前述したようにオレンドルフ教授法にその萌芽が見られる文型を確立しようとする考え方が見られる。ここまでの、岡倉の文法や会話の教授法のうちに、明らかにオレンドルフ教授法からの影響が観察される。岡倉は、初学者にはオレンドルフによる問答法を優れたものとし、文の練習は構造上の類似を基としてなされるべきである、即ち、文型としての文の定着練習をする、文法は会話のなかで教えるのがよいとしている。

九. 翻訳については、2-2-3で前述したが、「新論」でもやはり岡倉は「生徒をして直訳風の弊を避けしめ常に本邦流の思想の示し方を基礎とし之に由り原意の在る所を論し原文の語句に拘泥する事なく且つ類を以て事を断ずるの力を養はしむるを宗とすべきなり³⁰⁾と論じている。

以上、岡倉の外国語教授法を考察してきたが、オレンドルフ教授法を良しとし、その影響を深く受けて自身でも実践してきたことがよく見てとれる。「新論」には直接、日語学堂で実践したらどうであったと日語学堂の名前を挙げて言及はしていないが、オレンドルフの名前を何度も挙げ、岡倉自身が最も信頼している教授法がオレンドルフ教授法であったことがよくわかる論文である。「新論」には「グアン法」等、岡倉が推奨する他の教授法の名前も挙げられているのだが、オレンドルフの名前が最もよく挙げられている。

オレンドルフ教授法は、岡倉のように学習者の言語を知悉し、翻訳や文法教授と会話という、四技能の総合力の促進を工夫していた学者には、当時としては斬新な新しい教授法をもたらしたのであると結論できる。

4. おわりに

本稿の目的は、井上勤による受容を通してのオレンドルフ教授法の実体を探ることならびに岡倉由三郎による日本語教育におけるオレンドルフ教授法の受容の調査であった。

オレンドルフ教授法の実体に関しては明確にし得たかと思う。また、英語学者であり、旧韓末における最初の日本人の日本語教師とされる岡倉由三郎によるオレンドルフ教授法の受容においては、その影響は明確になった。しかし、日語学堂におけるオレンドルフ教授法の実践録とでもいべき

29 同上、p.36

30 同上、p.37

詳細を語る資料の存在が確認できない。元々、存在しないのかもしれない。『教育時論』340号（1894年9月25日刊）には、「時論が三回の附録に分載せる岡倉氏の論文は、能く従来の教授法の欠典を挙げて、且其正路を示したりと云ふべし。（中略）又此論文に於て、岡倉氏が朝鮮人に日本語を教授したる方法を、詳細に聞くを得ざりしは、甚遺憾なり。願くは氏再び之を世に公にせられんことを。」³¹と結んでおり、岡倉が日語学堂における体験を具体的には語っていないことがわかる。今後の課題は、その体験を語る資料ないしは更により多くの周辺資料を探し求め、岡倉の日語学堂におけるオレンドルフ教授法の採用の実際をより明確にすることにある。

最後に、岡倉は、母語との文構造を比較しながら学ばせることを強調していた。旧韓末における、まだ外国語としての日本語教育期に、母語を奪う直接法ではなく、オレンドルフの文法訳読教授法が尊重されたのは象徴的でもあるといえる。

謝辞：文献入手にあたり、目白大学図書館の高橋千恵子氏に大変お世話になりました。記して謝意を表します。

文 献

1. 任栄哲「韓国人から見た日本語」大阪樟蔭女子大学にて講演、1997年
2. Ollendorff著、井上勤訳：“The Book of Learning English in Six Months”『六ヶ月間英語卒業書』青木嵩山堂、1888年
3. 岡倉由三郎「外国語教授新論附国語漢文の教授要項」『教育時論』第338-340号附録 開発社 1894年
4. 同上「朝鮮国民教育新案」『東邦協会会報』第2号付録 1894年
5. 同上「朝鮮の教育制度を如何すべき」『教育時論』第338号 開発社 1894年9月5日刊
6. 同上「岡倉教授の翻訳意見」『英語青年』1908（明治41）年1月
7. 同上「恩師チャムブレン先生を偲ぶ」『英語青年』第73巻2号、1935年
8. 同上「琉球の読者に」『英語青年』1916（大正5）年
9. 「岡倉由三郎氏の語学教授論」『教育時論』（筆者名なし）第340号 開発社 1894年9月25日刊
10. 言語文化研究所編『長沼直兄と日本語教育』開拓社 昭和56年
11. 中浜万次郎訳『英米対話捷徑』1859年
12. 平賀優子「「文法・訳読式教授法」の定義再考」『日本英語教育史研究』第20号 2005
13. 渡辺実「直訳的な言い方—直訳語と直訳文—」『日本英学史研究会研究報告』8号 1964年
14. A.P.R. Howatt “A History of English Language Teaching” Oxford University Press, 1984
15. H.G. Ollendorff “Ollendorff’s New Method of Learning to Read, Write, and Speak a Language in Six Months, adapted to German.” (1841) p.155

31 「岡倉由三郎氏の語学教授論」p.13